

2024年12月22日 クリスマス主日礼拝 待降節 第4主日

説教題：「地には平和、キリストの誕生」

聖書箇所：イザヤ書26章12 - 13節（1099頁）、ルカによる福音書2章1 - 20節（102頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 20 交読詩編：詩編126編1 - 6節（143頁）

讚美歌：83/267（ああベツレヘムよ）/264（きよしこの夜）/265（天なる神には）/27

「今週の聖句」〔いと高きところには栄光、神にあれ、/地には平和、御心に適う人にあれ。〕

（ルカ伝2：14）

「牧師室の窓」 「冬の空 オリオン上(のぼ)り輝きつ 主の降誕の 彼の日を思う」

「平和への 願いは篤し ノーベル賞 核の現実 如何でか破らむ」

(1)皆様、おはようございます。そして、クリスマスおめでとうございます。今朝、小竹向原駅から教会までのレンガ道や歩道にモミジの枯葉が沢山ありました。幾つかを拾いまして、ここに持ってきました。ご覧の通り、大きさも、葉先の数も異なっており、夫々に個性豊かな落ち葉です。

今年のクリスマスから1年が経過し、新たなクリスマスを迎えることになりました。この1年間は皆さまにはどの様な1年でありましたでしょうか。この1年を暫し振り返り、新たな1年に向けて考える節目の時期です。幼児や子供であれば1年間の成長は傍目(はため)から見ても著しいものがあります。年齢を重ねますと、成長と共に老化が気に掛かります。併し、外見の変化以上に内面の変化があります。変化を認識すること、変化を受け入れることは大切なことです。私たちが暮らしていたこの1年間は客観的に見ても、激動の1年間であると言えるでしょう。地震や風水害の脅威に直面し、コロナ禍からの回復途上にあること、ウクライナや中近東での戦争の激化、拡大する闇バイト、直近では、自動車会社の生き残りへの模索などなどがあります。地球上では、自国のみの利益を優先し、国際協調により共に栄えるという人類の知恵が存亡に危機にあります。私たちが自分自身のことで手一杯であるとしても、30年後50年後に生きる人たちのために、私たちに何が出来るのだろうか、何をしなければならぬのか、今日の聖書箇所から考えてみたいと思います。けさは「地には平和、キリストの誕生」と題してお話いたします。

(2)まずは旧約聖書から見ていきましょう。先程、イザヤ書の一部を読んでいたいただきました。26章の12節13節です。ここには〔主よ、平和をわたしたちにお授けください。…あなた以外の支配者が我らを支配しています。しかしわたしたちは、あなたの御名だけを唱えます。〕と書かれています。

イザヤ書は全部で66章あります。今から約2750年前から約200年間に、3人のイザヤがおりました。国内の政治的混乱や外国との戦争により、平穏な生活が奪われた時代が続きました。歴史を振り返れば、平穏な時代は長くは続きません。それだけに平和を望む希望が絶えることがないのです。主なる神への祈りが唯一の心の拠り所の状態です。旧約聖書の根底には平和への希望がごく細い糸のように繋がり途絶えることはありませんでした。「主よ、平和をわたしたちにお授けください。」この願いが数百年の間、細々と、併し、確実に、繋がってきました。その願いを運ぶのは神の御名を祈る祈りでありました。祈りとは弱々しいことのように思われますが、決してそうではありません。何故ならば、祈りとは神との交流であり、会話であるからです。その人の人生の骨格となり、エネルギーとなるからです。

(3)数百年の時を経て、今から約2千年前、ローマ帝国が支配していたユダヤの地に、一人の赤子が生まれました。王侯貴族の家族としてではなく、庶民の子として生まれました。旅の途中の馬小屋で生まれたと聖書は記しています。神の子イエス・キリストの誕生物語です。父親のヨセフはガリラヤ湖の近くにあるガリラヤ地方のナザレ村に住んでいました。ヨセフの職業はマタイ伝

によれば大工と報告されています。手に職を持ち地域の中で働いていたということは、経済的に独立しており、住民としての地位を得ている、ユダヤ教の教えに馴染んでおり、分別のある人物と言えましょう。そのヨセフはローマ皇帝が出した命令によって住民登録をしなければなりません。ヨセフはダビデの家系にあるために、ナザレから約100kmも離れたベツレヘムに行かねばなりませんでした。

ベツレヘムは標高約800mにあり、100kmの道のりは下り坂上り坂でした。標高800mと言うのは、琵琶湖に面した比叡山延暦寺や和歌山の高野山金剛峰寺とほぼ同じ高さです。身重になっていた妻のマリアの身を案じながらの旅です。相互に思いやる心が「平和の基本」であることが今日の記事の行間からにじみ出てきます。

(4)今日の聖書箇所(ルカ2)の6節7節には〔(2:6)…彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、(2:7)初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。〕と書かれています。馬小屋と思われるところでの宿泊と出産です。私たちには想像を絶する状況ですが、置かれている環境に適合しなければ生きて行くことができません。

ヨセフとマリアの精神状況は如何だったのでしょうか。彼らは困難な状況にあり乍らも、困難を克服することができる人物でありました。それは物事を、置かれた環境によって判断するのみならず、自分は何をすべきなのか、自身の存在意義を理解し、命を守ることを大切にしたからだと思います。そのヨセフとマリアに対して、神様は生まれた赤子が誰であるのかを理解させるために、ひと工夫するのです。つまり、客観的な事実を加えて、ルカ伝の読み手である私たちにも伝えようとしつつ、物語が進んでゆきます。

(5)8節～18節を見てみましょう。〔(2:8)その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。(2:9)すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。〕場面がガラリと変わり羊飼いたちが夜間に羊を見守っている場面です。旧約聖書の創世記に出てくる羊飼いは当時の社会の重要な担い手でしたが、小麦やぶどうなどの農業が発達し、商業活動も活発になりますと、羊飼いの仕事は社会の片隅に追いやられてしまいました。天使はその様な羊飼いたちに現れて、神の子イエス・キリストが誕生したことを知らせたのです。

当時の社会構造の上流階級や学者たちに知らされるのでもなく、大勢の人々に知らされるのでもありませんでした。神が神の本質を表わすこと示すことを「啓示」と言います。(啓示の啓とは、拝啓お元気ですかの拝啓の啓、啓示の示とは示すという字です。)神の啓示とは人間の社会の尺度・物差しで測るようには行なわれるものではありません。マタイによる福音書に書かれている様に、イエス・キリストの誕生を当方の三博士から聞いた権力者ヘロデ王もエルサレムの支配階級や上流階級の人々も「不安」になったのです。

人間の社会には見えない階層や線引きがあります。人間の歴史はそのことの実を示しています。歴史を学ぶことの大切さは、社会の一員として、微力ながらもより良き社会を作るために努めることにあると思います。町内の清掃やゴミを自ら拾うこともその第一歩だと思います。

(6)9節を見てみましょう。主の天使が現れて、羊飼いたちは驚き恐れしました。そして10節11節です。〔(2:10)天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。/(2:11)今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。〕「民全体に与えられる」とは、すべての人に、漏れなく、「大きな喜び」が与えられたのです。数百年も前のイザヤの時代から細々と伝えられてきた神の言葉が実現するのです。「あなたがたのために救い主がお生まれになった」この言葉をどの様に理解するかが大切です。何だ馬

鹿々々しいと思えば、思考力はそこで停止、ストップしてしまいます。人は夫々の人生の中で、誠に奇妙な瞬間・場面に出会うことがあります。

私は小学生の時に仲良しの中にお寺の子供たちがいて、学校が終わり寺で遊びました。住職の話の聞くと、お菓子がもらえるのです。楽しみでした。門前の小僧ではありませんが、寺によりお経が異なることを耳で知りました。お釈迦さまやお大師さんについての話には深い意味がありそうだと思うようになりました。宗教と言うと、マスコミや所謂知識人と呼ばれる人々は敬遠しますが、そうではありません。日本では仏教思想が背景として有り、欧米ではキリスト教思想を理解しないで物事を論じることは出来ません。日本では本物の宗教と偽物の宗教とを混在して見ているのです。日本のマスコミや所謂知識人は世界水準には達していないように思われます。

(7)14節を見てみましょう。天使の言葉が書かれています。「(2:14)「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」」聖書に書かれている「平和」とは何でありましょうか。古代のギリシア・ローマでは平和とは、戦争のない状態や魂の平安と理解されていたようです。旧約聖書では、詩編34編に〔(詩編34:15)悪を避け、善を行い、平和を尋ね求め、追い求めよ。〕と書かれています。具体的には、身近な人々や外国の人々との友好的な関係を維持することにあります。従って、政治的・経済的に調和がとれている状態であると考えられます。ここには「平和を尋ね求め、追い求めよ」と書かれていますので、平和の実現には困難が伴うこと、併し、努力せねばならないことが書かれています。新約聖書のエフェソの信徒への手紙第2章(14~17節)には、ユダヤ人も異邦人(外国人のこと)も神との和解により互いの敵意を失くし平和の福音を知らせると書かれています。

今年のノーベル平和賞に「日本原水爆被害者団体協議会」が受賞しました。長い年月でのたゆまぬ行動が平和を求める人々の心に響き受賞されました。更なる進展が私たちを含めて必要になります。日本も国際社会も激動の時代へと入っています。予測が不可能な時代にこそ、聖書の御言葉が私たちを導いてくれるでしょう。

「平和」とは、「神との対話によって、どの人もその人の人生の主役となること」と私は思います。年齢や障害の有無や国籍人種にかかわらず「神との対話、そして、夫々の人生の主人公となる社会」のためにイエス・キリストはおられるのだと思います。皆様にとっての平和とは何でありましょうか。クリスマスを迎えて聖書の御言葉を受け止めては如何でしょうか。

・・・お祈りします。

主なるキリストの神様。私たちは主の降誕・お誕生を迎えようとしています。私たちは、慌ただしい生活にあっても、聖書の御言葉によって養われていることに感謝いたします。御言葉に耳を傾け、悔い改め、神のもとに立ち帰り、日々を過ごして参りたいと願っています。

戦争が起きている地に住む人々に、自然災害で困難の中にある人々に、生活の中で困っている人々に、平安と慰めがありますように。教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、み恵みがありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 **アーメン**

〔**新共同訳**イザヤ書(26:12)主よ、**平和をわたしたちにお授けください**。わたしたちのすべての業を、成し遂げてくださるのはあなたです。(26:13)わたしたちの神なる主よ、あなた以外の支配者が我らを支配しています。しかしわたしたちは、あなたの御名だけを唱えます。〕

〔**新共同訳**(ルカ伝2:1)そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。(2:2)これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。(2:3)人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。(2:4)ヨセフもダビデの家に

属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。(2:5)身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。(2:6)ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、(2:7)初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。(2:8)その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。(2:9)すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。(2:10)天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。(2:11)今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。(2:12)あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(2:13)すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。(2:14)「いと高きところには栄光、神にあれ、/地には平和、御心に適う人にあれ。」(2:15)天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。(2:16)そして急いで行って、MARIA とヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。(2:17)その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。(2:18)聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。(2:19)しかし、MARIA はこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。(2:20)羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。】